

令和5年度第1回青少年部会 摘録

- 1 日 時 令和5年8月2日（水）午後3時～午後5時
- 2 場 所 京都経済センター 6－A会議室
- 3 出席者 大束委員、國重委員、竹久委員、玉井委員、長者委員、中村委員、
中本委員、前田委員（8名）
- 4 欠席者 井原委員、北川委員（2名）
- 5 議 題
 - （1）京都市はぐくみプラン策定後の各事業の進捗状況等について
 - （2）次期京都市はぐくみプラン策定に向けた青少年・若者の意識行動に関する調査
（市民ニーズ調査）に係る調査項目について
- 6 配布資料
 - 資料1 委員名簿
 - 資料2 京都市はぐくみプランに基づく取組の進捗状況について
 - 資料3 次期京都市はぐくみプラン策定に向けた調査について
 - 資料4 令和5年度青少年・若者の意識行動に関する調査（市民ニーズ調査）調査票（案）
 - 資料5 青少年部会対象調査
 - 資料6 調査項目比較一覧表
- 7 参考資料
 - ・ 京都市はぐくみ推進審議会条例・施行規則・運営要綱
 - ・ 前回調査票（青少年・若者に関する意識行動と思春期保健に関する調査）
 - ・ 前回調査結果報告書（概要版）

事務局	京都市はぐくみ推進審議会令和５年度第１回青少年部会を開催する。 本日の会議については、市民に議論の内容を広くお知らせいただくため、京都市市民参加推進条例第７条第１項の規定に基づき公開することとしている。あらかじめ御了承いただきたい。 それでは開会に当たり、大東部会長から御挨拶を頂戴する。
大東部会長	御多用の中お集りいただき感謝する。 当部会は現行の京都市はぐくみプラン策定後、初めての開催となる。令和元年度にプランが策定された後、コロナ禍となり、開催されなかったので、施策の進捗確認等ができていなかった。現行プランが令和６年度末であることから、来年度には新たなプランを策定するということで、それに先立ってアンケート調査を実施される予定である。 久しぶりの開催となるが、委員の皆様には忌憚のない御意見を頂戴したい。よろしくお願いします。
事務局	「京都市はぐくみ推進審議会条例施行規則」第４条第３項において、当部会は、委員の過半数が出席しなければ、会議を開くことができないこととされているが、本日は、委員１０名中８名の方に御出席いただいているため、当部会が成立していることを御報告申し上げます。 ここからの議事進行については、大東部会長にお願いします
大東部会長	それでは、議事に入る。 まず、議題（１）京都市はぐくみプラン策定後の各事業の進捗状況等について、事務局から説明をお願いします。
事務局	【京都市はぐくみプラン策定後の各事業の進捗状況等について】 <u>資料２</u>を用いて説明。
大東部会長	ただ今の事務局からの説明について質問はあるか。
大東部会長	質問はないようなので、続いて、議事（２）次期京都市はぐくみプラン策定に向けた青少年・若者の意識行動に関する調査（市民ニーズ調査）に係る調査項目について、事務局から説明をお願いします。
事務局	【次期京都市はぐくみプラン策定に向けた青少年・若者の意識行動に関する調査（市民ニーズ調査）に係る調査項目について】 <u>資料３～６</u>を用いて説明。
大東部会長	ただ今の事務局からの説明について質問はあるか。

國重委員	前回調査では、青少年と保護者に対して調査をされていたが、今回は青少年のみの調査に変更されている。この理由はなにか。
事務局	青少年・若者に対して調査を実施し、その調査結果を施策に反映させたいと考えている。また、国の方ではこどもの意見を聴くことを重視していることもあり、本市としても、権利の主体となる青少年・若者に対して、回答を得やすいよう設問数を絞った形で考えている。
大東部会長	それでは、ここから調査項目を検討するに当たって、ワークショップ形式で2グループに分かれて意見交換を実施したいと考えているので、よろしくお願いします。
前田委員	<大東部会長、國重委員、竹久委員、前田委員が1グループ> 生きづらさを抱えていて、人間関係を築くのが苦手な若者が、楽しくゲームができるなど、気軽に過ごせる居場所が必要である。そういう若者は元気な若者がいる場所には行かない。 また、様々な理由で高校を中退した若者がオンラインで学べる場や働くことや就職について気軽に相談ができる場も必要だと感じる。
國重委員	児童館では0歳から18歳まで幅広い年齢層の子どもが利用している。中高生がボランティアとして障害のある児童に対して学習支援を行っている。こうした中高生のボランティア活動に対して、学校側の理解が足りていないように感じている。また、中学生が未就学児と触れ合う機会を創出するなど、異世代交流の取組を行っているが、地域で異世代交流をもっと推進する必要がある。 また、児童館は、平日午後6時半に閉館し、日曜は休館しているなど、現代の働く世帯のニーズに合っていないという課題がある。
竹久委員	市内7か所にある青少年活動センターを受託運営しているが、それだけで十分ではなく、学校や家庭でもない余暇を過ごせる場所をもっと地域に展開する必要がある。 大人側には若者の活動が見えづらく、若者に必要なサービスが知られていない。若者が悩み等を気軽に相談できる場所等の周知はしていても、関心のある層にしか届かず、情報発信の困難さがある。 青少年活動センターや児童館等は子ども・若者の声を普段から拾っていると思うが、それぞれの施設でやっており、そういった声をとりまとめて発信されるような場がない。 京都市の審議会等に若者が参加しているが、参加して発言するだけに終わっていないか。参加してそれがどう市政に活かされているのかが気になる。他都市では若者議会といった取組があるが、若者の声が市政に

	反映される仕組みがあっても良いと考える。
大東部会長	若者向けの事業は市内各所で色々展開されているが、バラバラで取り組まれているように感じる。中高生や大学生がボランティアで学習支援を行っているが、それがどう教育に活かされているのか、学校側と連携できているのかが気になる。 青少年活動センターを知らない大学生も多いので、青少年向けの施設があるということの周知はまだまだ改善の余地がある。 ユスカル（若者文化市）の説明があったが、京都学生祭典等の取組との連携も期待したい。 アンケートの設問に「地域活動への参加について」という項目があるが、若者が町内会や自治会に参加するような取組があるのか気になる。 こういった審議会や部会をもっと活用することで、支援者側や地域の団体がもっと顔の見える関係になっていくことも重要である。
前田委員	子ども・若者にとって、支援者側の入り口がどこであっても、その若者のニーズにきちんと合ったサービスに適切に繋げていく必要がある。そのためには、支援者側のネットワーク構築も重要である。 多様な居場所は必要であるが、なじめない、孤独感を感じている若者への個別のアプローチも欠かせない。 内閣府の子ども若者に対する調査で、自己肯定感などの気持ちを尋ねる項目があったが、こうした設問があっても良いと思う。
國重委員	ボランティア活動をする子はいわゆる「良い子」である。こうした「良い子」のための活動だけで良いのかは疑問である。今回のアンケート調査を回答するのも「良い子」だと思われる。 夏休みが終わると自殺者が増える傾向にある。大人側としては、夏休みが終わっても児童館という場所で過ごしても良いというメッセージを発していく必要があると考えている。
竹久委員	アンケートに回答する層と回答しない層がある。あくまで回答する層の意見として受け止めるべき。アンケート調査に回答しない子ども・若者の意見はどうやって聞くのか。 聞き方も重要であり、子ども・若者がアンケートに回答しやすいように配慮が必要である。書面で届くものを見るかという懸念もある。
大東部会長	手書きではなく、ウェブで簡単に回答できるように二次元コードの位置等を工夫しても良い。 また、ネットワークの重要性はよく挙がる課題であるが、関係機関の連絡先一覧があっても仕方がない。大人側、支援者側が顔の見える関係

	になって、出会う場が必要である。 ＜玉井委員、長者委員、中村委員、中本委員が1グループ＞ 大学生が子どもに関わる夏休み向けのプログラムを実施しているが、大学生と小学生の夏休み期間が異なるので、子ども向けの事業ができる期間が非常に短くなっている。
中村委員	
長者委員	私立の学校の生徒はなかなか地域の人と接する機会がない。地域の担い手が不足していることを踏まえて、中高大の一貫校ということもあり、どの年代も地域と関われるようなボランティア活動に参加するよう促している。最近では、現場の先生の働き方改革で放課後まで生徒の面倒を見ることが難しくなっているため、放課後等に学校外で活動できるような場をつくる必要がある。学校での勉強だけでは生徒の成長に繋がらない。
中本委員	大学がある学区で地域の夏祭りを実施していると、大学生はボランティアとして地域の活動に参加できる。一方で、大学がない学区との温度差が出たり、交流というより労働力として見られたりということが課題である。
長者委員	若者に情報が届いていないことが課題だと感じる。実際に色んな取組がされていると思うが、市民しんぶんを読んでいない若者も多く、知っている人だけが知っているという状況になっている。
中本委員	デジタル化という観点で、昨年度からデジタル連絡ツール「スクリレ」というアプリを教育委員会が導入し、学校やPTAから保護者向けの案内や回覧板の発信をしている。保護者や生徒が本当に見ているかどうかという課題はあるが、たくさんの情報を効率的に配信できるので非常に効果的である。
中村委員	情報発信の工夫として、チラシ等には必ず二次元コードを掲載するようにしている。これを掲載しておく一旦は読み取って、リンク先の情報は見てくれるようになる。
玉井委員	二次元コードに関して、大学生は反応しているが、その下の年代は反応してくれない。年齢層に応じた情報発信の工夫が必要だと感じる。
長者委員	元気な子、課題を抱えている子、ひきこもりの子など、本当に色々な子がいる。青少年が相談できる場所は年々増えていると思うが、なにかと敷居が高い。青少年だけでなく、保護者も悩んでいる。親も子どもも

	もっと気軽に相談できる場が地域にあってほしい。
中村委員	相談できる場所はたくさんあっても相談できない人はできないのが実態である。「相談するほどではない」と思っている子も多く、「もっと早く相談しておけばよかったのに」という状況になることが多い。彼等彼女等の思いを引き出すような身近な存在が必要である。
玉井委員	高校中退者の就労支援に関する対応に苦慮している。在学中は支援ができたとしても、学校側は、中退した生徒の情報までなかなか把握しておらず、中退した生徒の現在置かれている状況は、誰に聞いていいかわからず、支援が行き届いていないという課題がある。
中村委員	青少年活動センターに関しては、京都市という広さに対して、市内7か所にしかないのが、青少年に知られていない大きな原因だと思う。
長者委員	子どもたちの課題やニーズに対応するには、学校側と支援機関や相談機関をコーディネートできる人材が不足していると感じる。 また、中高生が気軽に参加できるイベントの仕掛けも必要である。一方で、人との繋がりをつくれない子が増えているので、そういう子は大勢が集まるようなイベントには参加しない。
中村委員	謎解きイベントなど、スマートフォンを使ったイベントは、同じ目的のことをやりながら個人でも参加できるようになっており、繋がりたい子は個別に繋がれる。こういった選択肢があることが参加しやすいイベントではないか。
中本委員	子ども同士の問題に保護者が介入することも多く、保護者側のリテラシーにも問題があるように感じている。また、学校の制服に関して「こころとからだ」の性の不一致に配慮した取組も出てきているが、ジェンダーや多様化に対して社会がどう許容していくのかは課題である。
大東部会長	次回第2回青少年部会で、本日の内容を踏まえて、再度意見交換できればと考えている。 その他、特になければ、予定の時間となったため、本日は、閉会とする。委員の皆様には積極的な御意見をいただき、お礼を申し上げる。 それでは事務局に進行を返す。
事務局	以上で本日の部会を終了する。